百々裏話（58）

おもて　あきら

〔多武峰の能―その八―〕

◎多武峰と大和猿楽（4）…結崎座、その他…

多武峰八講猿楽に三頭屋が任命された事実から、ある時期にそれに参勤した猿楽が三座であったろうとする前回の推測があたっているとすれば、その慣習の成立時期は不明に近いものの、大和猿楽四座参勤が慣習となる以前の段階では三座参勤であった可能性が強いと思われる。その三座が固定的であったか否かも問題であるが、他寺社に参勤する猿楽の例から類推して、かつては流動的であったとしても、南北朝期には漸次参勤猿楽が固定化しつつあったかと想像される。そうした観点に立って、南北朝期に多武峰八講猿楽に参勤した猿楽座について推測を試みたい。

まず、多武峰付属であったろうと前回に推測した外山（宝生）座が三座の一つであることは、ほぼ間違いないと思われる。

外山座と同じく多武峰付属であったろうと前々回に推測した山田猿楽の直系が出合座である。『申楽談儀』に、「出合の座は先は山田さるがく也」と言い、ついで山田猿楽の家系についての説―三兄弟のことなど―が続いていることが、それを物語っている。この出合座もまた、八講猿楽へ参勤するに十分な資格を備えていたと言えよう。

山田猿楽三兄弟の、長男宝生大夫が嗣いだ外山座、仲子生一が継承したと考えられている出合座が、ともに多武峰八講猿楽に参勤したとすると、弟の観世（観阿弥）が建立した結崎（観世）座もまたそうではなかったかと考えたくなる。結崎座結成の背景や事情は不明であるが、既に香西氏も指摘しておられる如く（『宝生』昭和39年12月号「山田猿楽」）、『申楽談儀』所載の魚崎（結崎）座の規則が、畿内に居て多武峰へ不参の場合は座を追放する罰則を設けるなど、興福寺よりも多武峰への参勤を重視している点から見て、多武峰と強いつながりを持って成立した座ではなかったかと思われる。『申楽談儀』に、

又、藤若と申しける時、大和多武峰の衆徒の、重代の天神の御自筆の弥陀の名号を、天神より霊夢二度に及ぶとて、渡さる。今にこれ有り。文字は泥也。

とあるが、世阿弥が幼名の藤若を称していたのは、父の観阿弥が結崎座を樹立してからそう年月を経ていない頃のはずである。当時すでに観阿弥が多武峰に参勤していて、多武峰衆徒が観世父子を知っていたからこそ、重代の宝物を譲渡したのであろうから、右の記事を、結崎座創立後間もない頃に観阿弥が多武峰へ参勤していたことを示し、八講猿楽参勤三座の一つが結崎座であったことを物語る史料として評価することが許されるかと思う。

右の如く、外山・出合・結崎の、山田猿楽系三座のいずれもに多武峰参勤の可能性を認めることは、八講猿楽参勤三座を即ち右の三座と考えることと必ずしも直結するわけではない。なぜならば、三座がそれぞれ八講猿楽に参勤したにしても、三座が揃って参勤したとは限らないからである。そうした疑いを抱く理由の一つは、結崎座が観阿弥によって創立された新しい座であると見なされ、三頭屋の設置が結崎座創立後に初まるとでも考えない限り、結崎座参勤以前には別の座と外山・出合の三座ではなかったかと考えられることである。また、出合座が、『申楽談儀』の頃まで一応存続してはいたものの、その活動の痕跡すら諸書に見えないことから、生一大夫の早世などのため早くに猿楽座としての活動が衰え、新興の結崎座が出合座の権益を引き継いだ場合も想像される。香西氏はそう見ておられるが、その場合も、山田猿楽系の三座揃っての多武峰参勤ではないことになる。

また、円満井（金春）座と多武峰の関係も考

慮せねばなるまい。『申楽談儀』に、観阿作の四位の少将(通小町)について、

四位の少将は、根本、山とに唱導の有りしが書きて、今春権の守多武の嶺にてせしを、後書き直されしと也。

とある。金春権守は観阿弥より若干後輩であったと考えられるが、多武峰で彼が演じた四位の少将(例の新作初演であったろう)を、観阿弥が書き直したというのであるから、かなり早い頃の話のようである。従って、金春権守の、つまりは円満井座の多武峰八講猿楽への参勤も、結崎座に劣らぬ古くからであったと考えることが可能であろう。これだけならば、多武峰への四座参勤慣習化以後とも思えるが、気になるのは『申楽談儀』に、

大和竹田の座、出合の座、宝生の座と、うち入うち入有。

と、竹田座(円満井座)と出合座、宝生座の間に縁戚関係があったことを意味するらしい記事があることで、この「うち入」が多武峰八講猿楽への参勤を媒介とするものであったことも想像できるのではなかろうか。

また、初瀬猿楽系で円満井座や結崎座と縁の深かった十二座も、正長二年五月の室町殿笠懸馬場での多武峰様立合猿楽に宝生(外山)座と組んで観世両座と競演した実績を持つだけに、多武峰に参勤した可能性無しとはしない。後に四座の一つとして八講猿楽参勤の義務を負うた金剛座も、記録こそ残していないものの、由緒の古い座だけに、多武峰とも早くから関係があったのかも知れない。

こう見てくると、南北朝期に八講猿楽に参勤した猿楽三座を推定することにかなりの困難が感じられるが、多武峰との関連の度合、地理的条件、その他種々の点を総合して考えると、初め外山・出合・円満井の三座であったのが、後に外山・結崎・円満井に変ったと見るのが最も可能性に富むのではなかろうか。四座参勤以前に三座だったろうとすること自体が推測であり、無駄な詮索である恐れなしとしないが多武峰と関係のある猿楽座についての言及を兼ねて、推測を重ねてみた。

さて、三頭屋の設定からかつては三座出勤であったと思われる多武峰八講猿楽は、南北朝後半から室町初期へかけての頃に、外山・結崎・円満井・坂戸(宝生・観世・金春・金剛)の四座参勤に変った。禅竹の『明宿集』に

多武ノ峯ニヲキテ、毎年、法講の神事、四ノ座ヲモテツトム。

とあるのなどがそれを物語っている。これは永享十年の多武峰焼失以前の慣習についての説のはずで、世阿弥時代にもそうであったと思われる。四座参勤の慣習成立の明確な時期や事情は明らかでないが、四座の興福寺参勤の慣行成立と同じ時期のようであり、両慣行が相関連して成立したことも十分考え得る。多武峰系の外山・結崎の両座が興福寺への参勤を義務(権利)として負う代償として、興福寺系の円満井・坂戸両座が多武峰参勤を義務(権利)として負うといった事情があったのではなかろうか。もしそうであれば、円満井と外山が縁戚関係にあったことも作用したであろうが、両寺の談合があってこそ実現し得たことのように思われる。両寺の交渉史が明らかになれば、四座の多武峰参勤の事情の追求にも期待が持てるのではなかろうか。

四座参勤の八講猿楽も永享十年(一四三八)の越智氏の乱による多武峰焼失の前後に中絶し、寛正四年(一四六三)に約30年ぶりで復活した時からは、二座の交代出勤となり観世と宝生、金春と金剛の組合せが常であった。その二座出勤の八講猿楽も、永正三年(一五〇六)の多武峰炎上までは一応続いたようであるが、それ以後の状況は明らかでない。室町末期は、興福寺薪猿楽すら満足に四座が参勤できなかったのであるから、八講猿楽も廃絶同様の姿となり、いつ絶えるともなく消滅してしまったものらしい。慶長九年の豊国神社臨時祭の猿楽が多武峰様式で行われた事実(その二参照)は、薪猿楽と同様豊臣秀吉の後援によって、八講猿楽が復活した時があった

のではないかを思わせるが、『談山神社文書』には、それを物語る史料を見出せない。

因みに、『談山神社文書』二二三の、丙戌（天正14年）付の「多武峰知行目録」によると、当時の多武峰領三千石余のうち千百八拾石余が結崎領の分であった。これが古来からの知行であれば、多武峰と結崎座の結び付きを説明する絶好の資料となるのであるが、残念ながらそうではない。多武峰寺は天正13年に秀吉の命令で大和郡山へ移転したが、その際旧知行六千石を半減して配分された新知三千石の中に結崎の地が含まれていたのであり、旧領だったわけではない。天正18年に多武峰へ復帰すると同時に、結崎は多武峰領ではなくなった。念のために書き添えておく。

昨年11月以来八回にわたって多武峰の能について考察してきた。興福寺と並んで大和猿楽と縁が深く、殊に観世・宝生両座にとっては発祥の地と言ってよいほどの多武峰であるのに、多武峰猿楽についての考察は意外に少なく、論ずべき点はまだ多く残されている。しかし、それらについての私の調査は甚だ不十分である。一そうの精査を期し、これまでに述べたことの増訂・体系化と合せて、別の機会に一論にまとめ上げたい。（43・7・3）

ひとこと

遠藤六郎

先日、文楽師匠の『ふな徳』と言う、落語をきいたが、如何にも面白かった。

この人の落語は、いわゆる新作落語に対して、古典落語といわれる部類に入るのだろうが、古典落語の面白さは、新作落語にくらべいかにも贅肉を削り、歪みを矯めて、という感じで、むだがなくすっきりしていて、ほのぼのとした面白さがある。

勿論作品だけではだめで、話す人の人格や技術がその作品に反映して、見聞く人の心にふれるものと思う。

能を演ずる場合でも、（もちろん古典をやる技術と勉強が大切だが）各演者の生き方がその曲のテーマの中に融け込んで来て始めて、面白いものが出来るのではないだろうか。

色々の人達との仕事や、接触で得た知識、或は体験が、直接は形に出ずとも、生き方として、無意識にしみ出したものが、その技術と相まって、今の能として、観客の共鳴を得るのではないだろうか……。

五月号のこの欄に、若松さんが書いておりましたが、幸い良き友、良き指導者を得て、現代の能について大いに語り合い、意見をぶつけあい、疑問を疑問として出し、研鑽して行きたいと思います。

9月13日（金）6時開演

浮舟　静夫
弓矢太郎　藤九郎
天鼓　四郎（弄鼓之舞）

11月8日（金）6時開演

粟田口　万之丞
定家　寿夫

12月4日（水）6時開演

竜田　順之
八尾　則寿
松虫　静夫

12月13日（金）6時開演

藍染川　鏡之丞
見物左衛門　万蔵
乱　慶次郎 真義